

世界編

神々の攻防

イスラム教徒がキリスト教の聖地を強奪

トルコ・イスタンブル／ブルーモスク



▲ ブルーモスクの正面。ミナレット(塔。バルコニーにスピーカーが付いている)の間に細い紐を掛けている。催しのときに文字を取り付ける

キリスト教の聖地を乗っ取ったイスラムはここを都と定める。後の皇帝アフメト一世はキリスト教会に負けるなど、それに勝る規模のモスク(トルコ語はジャマイ)の建設を命じたのがこの寺院である(AD1617に7年がかりで完成。6本のミナレットを持つ。しかしドームの直径は27.5mにとどまった)。当初は内部を青色に染めていたので通称ブルーモスクと呼ばれており、屋根がドーム状なのはハギヤ・ソフィアの踏襲である。

ブルーモスクと道路を隔てた向かい合う位置にあるハギヤ・ソフィアはイスラム寺院として使っていたのだが、現在は宗教博物館となっている。ドーム(最大直径31m)が雲のように何層にも重なりあい、なおかつその重量を拘束するための縁のリングが強固でなければならないのに、そこには多数のスリット状の開口部があって力学的には極めてアンバランスな構造になっている。そのためこの屋根は、神の手が見えない糸で天空から手繰り上げているのだと表現されている。ならば今までに崩壊しないのは奇跡だと聞いたところ「いやいや実は、これまでに3度ドームが落下した」とのことであった。そうだろうと頷ける。AD325コンスタンティヌス大帝が建設、AD537火災により、ユスティニアヌス大帝が再建。

その修復をしたところ、ビザンチン風のキリストのモザイク壁画や、ギリシャ正教の名残が表面に多数現れている。イスラム教は「コーランか剣か」と改宗を強要する(ササン朝ペルシャ=現イランをAD651に滅ぼしたときはそうした。悔しいペルシャは少数派のシーア派になったのだ。今でもイスラム圏での多数派は、サウジアラビアのワッハーブ派(スンナの一派)を除き、どの国もスンニ派が主流)。そうかと思えばこの博物館のように寛容さを見せることもある。税金さえ納めれば宗教は自由だと割り切った支配をした時代もあったことも事実である。



ハギヤ・ソフィア ▶

西ローマ帝国がAD476年、ゲルマン人によって滅ぼされた後も、東ローマ帝国は生き残る。その首都がコンスタンチノーブル(現在のイスタンブル)である。西ローマ帝国の国教がカソリック(普遍を意味する)なのに対して東ローマはギリシャ正教(オーソドックス=正統=派)で、その本山がハギヤ・ソフィア大聖堂。しかしイスラムの脅威に対抗しようと8回も十字軍を派遣したにも拘らず、小アジア半島を制覇したオスマントルコのメフメト2世の精鋭イエニチェリ(近衛兵)1万5千の攻撃でAD1453年終に陥落してしまう。